

続インカ・マヤと飛鳥の石造物

著者	猪熊 兼勝
雑誌名	阡陵：関西大学考古学等資料室彙報
巻	4
ページ	9-9
発行年	1981-11-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/00024410

続 インカ・マヤと飛鳥の石造物

猪熊兼勝

飛鳥の石造物で有名な「酒舟石」は、花崗石の巨石の表面、石の東端を起点として円形の窪みを彫り、幅10cm、深さ5cmの直線で結ぶ樹系図のように放射状の石である。その用途は饗宴用の導水の装飾石である。丘陵傾斜面に枕石を置き、流路のため酒舟石を西へ5度傾斜する位置で固定する。

昭和10年、酒舟石の南斜面上で土留めに使われていたとされる「車石」が15個掘出された。車石は長方形をした花崗岩の割り肌を利用して平滑にし、1条の直線に彫込んだ溝である。

大正7年、真神原の西端、飛鳥川に面した東岸から、もう一つの酒舟石が出土した。この年台風による大洪水があり、豊浦では家屋7軒が流水した。この大水によって酒舟石が露出したと思う。丘陵上にある酒舟石は車石に接続して、丘陵西端まで導水し、さらに真神原の平坦地を西へ200m導水させたのであろう。

ペルー、アンデスのインカ時代後期の遺跡として有名なマチュ・ピチュには飛鳥の車石に酷似した、というより「ウリ2つ」のインカの車石がある。飛鳥の石と同様、石の表面を平滑にし、その表面に酒舟車石と同寸法の直線溝を彫っている。マチュ・ピチュは山岳遺跡のため丘陵斜面を階段

状に石積建物群がある。この建物群にそって一辺約1mの方形石壁があり、この中へ導水施設が続く光景は、さながら高層マンションの段違いのベランダを見るようである。雨期には、この車石に雨水が流込むのか、流水痕跡がある。この施設を王者のシャワーとする説明があるが、ラセン状に迂回しながら山の下へ降る水の流れは、単なる浴場以前の用途があったのであろう。不思議なことにマチュ・ピチュの頂上には水源はない。はるか400m下のウルバンバ川の水をどのようにして汲上げたか判らない。高さ5mの丘陵上にある酒舟石について、庭園装飾用の導水説を説明すると、誰もその水源について質問がある。かつて、酒舟石の北に小さな飛鳥池があった。吉野十津川分水ができたため池が不要となり、運動場となったが、この池は灌漑用の池であった。この用途の池となる以前、小池があったのであろう。

1911年ビンガムによってジャングルの中より発見されたマチュ・ピチュは現在も発掘が進められている。飛鳥とインカの遺跡とは直接影響しあわないが、地球の両端にある文化を比較することによって各々の用途がより鮮明になり、機能を論証する手だてとなる。



酒舟石



酒舟石の車石



マチュ・ピチュの車石



マチュ・ピチュの導水施設